子どもが自分の心身を表現する言語活動の取り組み

学校保健　杉本　千津

1．学校保健における「言語に関する能力」および「説明」について

（1）　新学習指導要領と学校保健の関わり

教育基本法等が平成18年12月に改正され，学校教育法の一部改正，中教審答申（平成20年1月），学習指導要領の改正が行われた。新学習指導要領の基本的な考え方は，それまでの学習指導要領で重視されていた「生きる力」の育成がそのまま継続されており，現在の子どもたちの課題から，①「生きる力」という理念の共有，②基礎的・基本的な知識・技能の習得，③思考力・判断力・表現力等の育成，④確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保，⑤学習意欲の向上や学習習慣の確立，⑥豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実がポイントとされている。

その中の①「生きる力」，③思考力・判断力・表現力等の育成，⑥豊かな心や健やかな体の育成のための指導においては，人と対話するコミュニケーション能力，保健学習，健全な心身という面から，学校保健と関連性が深いと捉えた。特に，①「生きる力」と⑥豊かな心や健やかな体の育成においては，各教科において基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと習得させることと，自分に自信が持てず自らの将来や人間関係に不安を抱えている子どもたちの現状から，子どもたちに，他者，社会，自然・環境とのかかわりの中でこれらと共に生きる自分への自信を持たせる必要があると述べられている。

また，教育課程部会では，自分に自信が持てず人間関係に不安を持っている子どもたちの現状から見た重要な要素の例として次の４つに分類している。この分類については，学校保健の視点からするととても「生きる力」についての理解がしやすく，意図する目的が明確になるため，この分類を意識してすすめてみた。

A 自己に関すること	（例）自己理解（自尊・自己肯定・自己責任（自律・自制、健康増進、意志決定、将来設計））
B 自己と他者との関係	（例）協調性・責任感、感性・表現、人間関係形成
C 自己と自然などとの関係	（例）生命尊重、自然・環境理解
D 個人と社会との関係	（例）責任・権利・勤労、社会・文化理解、言語・情報活用、知識・技術活用、課題発見・解決

（2）学校保健と「言語に関する能力」および「説明」との関わり

学校研究のキーワードである言語に関する能力の「説明」を念頭におき，「生きる力」について新学習指導要領や中教審答申を読み込んでいくと，各教科・領域において，プレゼンテーションとして発表する説明が多くの場面で例示されている。学校保健から「説明する」場面を考えていくと，保健委員会活動，保健指導・保健学習，保健室での言語の活動場面が考えられた。そのうち，保健の授業や委員会など，ある場面においての「説明」も考えてみたが，それよりも，今の子どもたちには，他者，社会，自然・環境と共に生きる自分への自信を持たせることが大事とされているので，A 自己に関すること（自己理解）や B 自己と他者との関係（表現，人間関係形成）をより支援していくことにし，保健室へ来室した生徒の言語による表現を主にしていくことにした。

保健室内において，生徒の「説明する」力を高めたいと考えたが，保健室へ来室する生徒の目的および状況は，さまざまである。応急処置をしてもらいに来室した場合でも，説明できる場合もあれば，けがや疾病の重傷度が高く説明できない場合，人間関係から心身の不調を訴え上手く言葉にできない場合がある。

そこで，本校テーマである「言語に関する能力」および「説明」を広義にとらえ，子ども自身が何らかの訴えを表現し，できるだけ言語により相手に伝える力を身につけていくことにより，言語に関する能力の育成につなげていきたいと考えた。

そのため，来室した際には医学的側面と教育的側面から生徒の健康を共に考え，生徒に返しながら解決能力をつけていくよう働きかけてきた。それを１（１）に述べた４つの観点で照らし合わせると，A 自己に関すること：自尊，自己責任（健康増進，意志決定，将来設計），B 自己と他者との関係：感性・表現，人間関係形成，そしてC 自己と自然などとの関係：生命尊重が関係すると考えた。

２．「言語に関する能力」および「説明」に関する本校生徒の実態

保健室へ来室した生徒と関わってみて感じたことは，面識の少ない人との関わり方，意志の伝え方が消極的であると思えた。日常の信頼関係から培われてくる部分もあるが，けがや病気，またはその他の用件について話をするために来室した際も，単語，単語で話をしたり，こちらから聞いたことにだけ答えたりするという場面が多くあると感じた。また，こちらの問いかけに付き添いの友人の方に向かって疑問形で返答する生徒もいる。例えば，「今朝，熱を測ってきたの？」との養護教諭の問いに，友人に向かって「測ってきた？」や「熱あったかな？」と答えたりする。当然友人は「私がわかる訳ないでしょ」と答えているのである。特別，本校の生徒特有というわけでもないかもしれないが，現在の生徒の実態としては，素直な反面，大人の指示を待っている生徒が多いように感じる。また，自分で話をせずに友人に代弁してもらっている。これは，大人が子どもの感情や意志を先に読み取り，行動に移してしまい，子どもに「～～するように」と指示を出し，子どもたちは，思考・判断を行う必要がなく指示を待っているだけというような状態で育ってきているため，個人が自立して判断し行動に移すという面が育ってきていないのであると思う。病院を受診した際に，いつまでも保護者に説明してもらっているわけにいかず，自分の中で，疾病上必要とする疾病状況を医師や看護師へ伝える必要がある。それができるようになるためには，A 自己に関することと B 自己と他者との関係について意識しながら，保健室という空間で，１対１の対応から生徒自身が自分の状態を知り，他者（養護教諭）にその状況を自分の言語で伝え，理解しあうことができるようにさせていく必要があると考えた。

３．心身を表現する言語活動の取り組み

（１）．題材設定とねらい

保健室来室時，当初，問診表を渡し自分で記入していく形式をとっていたが，来室する生徒は，休憩時間中に来ることがほとんどであり，次の授業の準備・移動を含めて 10 分間の休憩時間で問診票の記入，バイタルサインの測定，言語を意図する問診を行うことは，時間的に難しく，必ずといっていいほど授業に遅れてしまう場合があった。また，生徒に言語で伝えてもらおうと問診をしていくと，問診票にかいてあることを再度聞きとることが多く，生徒にとっては，同じ内容を２度，聞かれていることになるため生徒と養護教諭のやりとりの中で違和感を感じた。そのため，問診票に生徒自身で記入することはやめ，養護教諭が「どうしたの？」と聞くことから始め，生徒は，言語による表現により状況を伝えられるようにしていった。

生徒が保健室へ来室し，養護教諭がその生徒へ対処した後に調査（資料１）を行い，生徒自身が感じたことと他者である養護教諭が感じたことを比較し，検討することにより，①生徒の説明できた満足度はどのようなものか，②生徒は相手（養護教諭）に理解してもらえたと感じているか，③生徒が説明したことに対し満足感をもっているか、④生徒と養護教諭の間において説明できた満足度と養護教諭の説明できていると感じる基準が同じであるかを見極め，今後必要とする生徒への指導方法を導いていきたい。

（２）アンケート調査結果

アンケート調査は，2010年10月末～11月中旬までの実質８日間で実施し，選択と記述で行った。選択肢については、５段階に分け、伝えられた（満たされた）を５、伝えられなかった（満たされなかった）を１とした。対象は1～3年の保健室来室者で回答数21名。来室目的と学年については表１のとおりである。

表１　学年と来室目的

単位(人)

	けがの手当て	病気の手当て	計測	計
1年	2	6	0	8
2年	2	3	0	5
3年	3	3	2	8
計	7	12	2	21

アンケート調査結果は，図１のグラフで示したように，生徒は，養護教諭に用件を伝えることができ，理解もしてもらえ，目的が満たされたと多くが回答している。目的の満足度の理由としては，処置をしっかりしてもらえた，話を聞いてもらえた，身体が回復した（回復しなかった），対応が優しかった，身長がのびたなどがあげられた。この中で，用件を伝えられたかとの質問項目において２名が必要なしと答えているが，これは，身長を計測しに来た生徒であり，養護教諭に用件を伝える必要はないと判断したと思われる。

アンケート結果を生徒が記入し保健室から退室した後，その記入されたアンケートに対し，相手（養護教諭）からの目線で用件を伝えられていたか，理解してあげられたかを記録していった結果が図２である。これをみると，用件をだいたい伝えられていたと感じる生徒より半分くらい伝えられていたと感じる生徒の方が多くいた。理由としては，生徒がどのような対処を望んでいるかという面についてはわかりづらく，聞き直しても，対処については，養護教諭におまかせや指示を待つという生徒が多くいたためである。

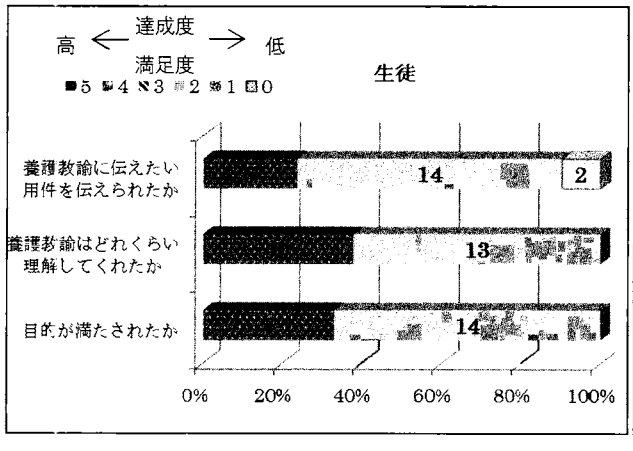

図１　アンケート調査結果（生徒）

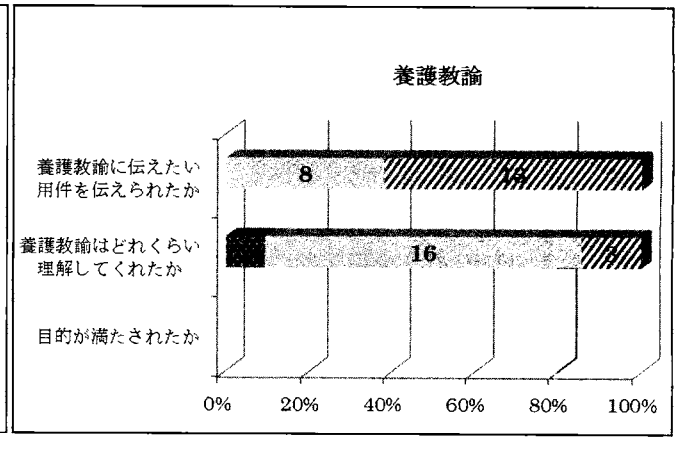

図２　アンケート調査結果（養護教諭）

次に，生徒が言語で用件を伝える評価と来室目的の満足度に対しての比較を行ったところ、表２のようになった。言語での用件をつたえることが５段階中５の者は、目的に対しての満足度も５や４と高い。

χ^2検定を行ったところ、生徒が用件を伝えられたかどうかは、来室した目的の満足度に差があることがわかった（$df=4, p<0.01$）。

表２　生徒自身の伝える達成感と目的満足度

言語で用件を伝える　（単位：人）

生徒の満足度	すべて伝えられた	ほぼ伝えられた	半分くらい	あまり伝えられなかった	伝えられなかった	伝える必要なし
満足している	3	2	0	0	0	2
まぁまぁ満足している	2	12	0	0	0	0
半分くらい	0	0	0	0	0	0
少し不満が残る	0	0	0	0	0	0
不満だ	0	0	0	0	0	0

χ2乗検定の結果

総度数	N	21
検定統計量	χ2	23.3125
自由度	df	4
p値	p	0.00011

＝検定の結果＝
有意水準0.01(1%)で，(母集団について)差がある

生徒が養護教諭に伝えられた達成度と養護教諭が生徒から伝わった達成度を比較したものが表３である。これから、生徒はすべて伝えられた（５段階中５）と答えても養護教諭はほぼ伝えられた（５段階中４）や、生徒がほぼ伝えられた（５段階中４）が１４人に対して養護教諭が同じようにほぼ伝えられた（５段階中４）と答えたのは３人にすぎず、多くはその１段階下の半分くらい（５段階中３）が１０人というように、生徒と養護教諭の間で１段階下がった評価になった。χ^2検定を行ったところ、生徒と養護教諭で伝えたという達成度に差があることがわかった（df=2, p<0.05）。

表３　生徒と養護教諭間における説明達成度

養護教諭　（単位：人）

生徒	すべて伝えられた	ほぼ伝えられた	半分くらい	あまり伝えられなかった	伝えられなかった	伝える必要なし
すべて伝えられた	0	5	0	0	0	0
ほぼ伝えられた	0	3	10	1	0	0
半分くらい	0	0	0	0	0	0
あまり伝えられなかった	0	0	0	0	0	0
伝えられなかった	0	0	0	0	0	0
伝える必要なし	0	0	0	2	0	0

χ2乗検定の結果

総度数	N	21
検定統計量	χ2	7.88571
自由度	df	2
p値	p	0.01939

＝検定の結果＝
有意水準0.05(5%)で，(母集団について)差がある

４．考察

できるだけ多くの生徒にアンケートを書いてもらいたかったのだが，短い休み時間に処置をした後に書いてもらうとなると時間がかかり次の授業に遅れるため，昼休みや保健室で授業時間を休養することになったなど比較的時間がとれた生徒に対し調査を行った。そのため，調査数が21件と少なくなってしまった。

この調査の結果から，生徒は、他者（養護教諭）へ伝えることができ，理解してもらえたと思う者が多かった。このことは、生徒自身の自尊心や自己肯定感につながるものであり、満足感や安心感を与えることは大切なことであると考える。養護教諭へあまり伝えられなかった生徒に対しては、伝えられなかった理由を書いてもらい、保健室での言語による表現の困難さがどこにあるかを知ることにより、今後の手だてにしたかったのだが、養護教諭に対し、半分くらい（３）～伝えられなかった（１）と答えた生徒に対しての設問としていたため，誰も答えず，伝えられない部分が何かを知ることができなかった。

その他に，生徒が他者（養護教諭）へ伝えた・理解してもらえたと思う内容と養護教諭が自ら伝えてほしいと考える内容に差がみられた。これは，個人の尺度が様々であることも影響するかもしれないが，それより，子どもたちは，何をどのように相手に説明すればよいかの知識と養護教諭が求めているものとにずれが生じていることが理由と考えられる。養護教諭が必要とする情報を，子どもたちはどのような語彙を使ってどのように伝えられていたか観察してみると，伝えられたと感じていることと内容の比較ができ，

生徒たちにとっては，今後の伝えるべき内容を理解することができるのではないかと考える。また，他者に伝える以前に自己理解（分類のA自己に関すること）の部分が育っておらず自分に聴いてみることができていないことも考えられる。

そのために，生徒が言語による表現をしたと評価する基準を明確にし、生徒は、他者（養護教諭）に何を伝えなければいけないのかを知識として知っておく必要がある。また、生徒が育っていないと思われる他者への伝え方について，コミュニケーションの基礎である１対１での対応を丁寧に行い、生徒が安心して身体を表現できる時間と空間の確保を意識していく必要がある。そのことにより、A 自己に関すること（自己理解（自尊心・自己肯定・自己責任））の支援となる。また、自分を見直す（自己責任（健康増進、意志決定））ことをより意識づけることも同時に行っていく必要があると考える。

５．まとめ

学習指導要領から学校保健を見直していくと現在の子どもたちの実態，足りない力，その原因・背景，育みたいポイントなどが，健康面からだけではなく人間形成の大きな一部としてとらえることができ，養護教諭として子どもたちに本当につけたい力，付けさせなければならないものを理解するきっかけとなった。

言語による表現活動に焦点を当ててみたが、その力をつけていくためには、一つだけでなく、多角的に見て進めて行く必要がある。一人職としてなかなか進めていけない部分もあるが、学校教育目標を意識して、保健室からの生徒像をイメージし、附属中学校の生徒が３年間でどのような生徒になっていってほしいかをより具体的にしていきたい。

今後も各教科や領域，その他の活動などから人間形成と絡ませて、保健室で行う言語による表現を自分でできる生徒育成のための手だてを求めていきたい。

＜基本資料＞

文部科学省「中学校学習指導要領」平成20年3月
中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」答申，平成20年1月
言語力育成協力者会議「言語力の育成方策について」報告書，平成19年8月
財団法人学校教育研究所編「新しい教育課程における言語活動の充実」平成22年2月

資料1

【生徒】

1. 学年性別

学年性別

年	男	女	計
1	3	5	8
2	2	3	5
3	4	4	8
計	9	12	21

2. 今回何の用事で保健室へ来室しましたか

来室目的

	けがの手当て		病気の手当て		計測		計
年	男	女	男	女	男	女	
1	2	0	1	5	0	0	8
2	1	1	1	2	0	0	5
3	2	1	2	1	0	2	8
計	5	2	4	8	0	2	21

3. あなたは、養護教諭に伝えたい用件をつたえらましたか

用件を伝えられたか

	すべて伝えられた		ほぼ伝えられた		半分くらい		あまり伝えられなかった		伝えられなかった		伝える必要なし		計
年	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1	1	1	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	8
2	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	5
3	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8
計	2	3	7	7	0	0	0	0	0	0	0	2	21

4. 3の設問で3（半分くらい）～1（伝えられなかった）と答えた人にききます。なぜ伝えられなかったのですか

なし

5. あなたの伝えた用件を養護教諭はどれくらい理解してくれたと思いますか。

理解してもらえたか

	すべて理解してもらえた		だいたい理解してもらえた		半分くらい		あまり理解してもらえない		全然理解してもらえない		空欄		計
年	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1	2	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	8
2	0	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5
3	1	2	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	8
計	3	4	6	7	0	0	0	0	0	0	0	1	21

6. あなたは保健室へ来室した目的が満たされましたか。

来室目的の満足度

	満足している		まぁまぁ満足している		半分くらい		少し不満が残る		不満だ		計
年	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1	0	1	3	4	0	0	0	0	0	0	8
2	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	5
3	2	4	2	0	0	0	0	0	0	0	8
計	2	5	7	7	0	0	0	0	0	0	21

その理由は何ですか

処置をしっかりしてくれた	9 人
話しを聞いてくれた	3 人
症状について（よくなった，回復しなかった	7 人
対応(優しい)	1 人
身長	2 人

【養護教諭からみて】

用件を伝えられたか

	すべて伝えられた		ほぼ伝えられた		半分くらい		あまり伝え		伝えられなかった		伝える必要なし		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1	0	1	1	2	2	2	0	0	0	0	0	0	8
2	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	5
3	0	2	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	8
計	0	3	4	4	5	5	0	0	0	0	0	0	21

理解してもらえたか

	すべて理解してもらえた		だいたい理解してもらえた		半分くらい		あまり理解してもらえない		全然理解してもらえない		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1	0	0	3	4	0	1	0	0	0	0	8
2	0	0	1	3	1	0	0	0	0	0	5
3	1	1	2	1	1	0	0	2	0	0	8
計	1	1	6	8	2	1	0	2	0	0	21

生徒：目的満足度(6)―生徒：伝えられたか(3)　比較

言語で用件を伝える

目的満足度	すべて伝えられた	ほぼ伝えられた	半分くらい	あまり伝えられなかった	伝えられなかった	伝える必要なし
満足している	3	2	0	0	0	2
まぁまぁ満足している	2	12	0	0	0	0
半分くらい	0	0	0	0	0	0
少し不満が残る	0	0	0	0	0	0
不満だ	0	0	0	0	0	0

生徒：目的満足度(6)―生徒：理解させることができたか(5)　比較

理解させられたか

目的満足度	すべて理解してもらえた	だいたい理解してもらえた	半分くらい	あまり理解してもらえない	全然理解してもらえない
満足している	4	11	0	0	0
まぁまぁ満足している	3	2	0	0	0
半分くらい	0	0	0	0	0
少し不満が残る	0	0	0	0	0
不満だ	0	0	0	0	0

生徒：伝えられたか(3)―養護教諭：伝えられたか　比較

養護教諭

生徒	すべて伝えられた	ほぼ伝えられた	半分くらい	あまり伝えられなかった	伝えられなかった	伝える必要なし
すべて伝えられた	0	5	0	0	0	0
ほぼ伝えられた	0	3	10	1	0	0
半分くらい	0	0	0	0	0	0
あまり伝えられなかった	0	0	0	0	0	0
伝えられなかった	0	0	0	0	0	0
伝える必要なし	0	0	0	2	0	0